

中学校入学後の学校生活に対する認知と学校適応感の関係

南 雅 則*

浅川 潔 司** 小林 小夜子** 西垣 憲 明*** 村上 めぐみ****

本研究の目的は、中学校新入生の入学前と入学後の中学校生活に対する認知のズレと学校適応感との関係を検討することであった。中学1年生368名(男子184名, 女子184名)が研究協力者となった。学校適応感は6領域学校適応感尺度(栗原・井上, 2010; 以下, ASSESS)によって、学校生活に対する認知は中学校に対する認知のズレ測定尺度(The Inventory of the Perceived Discrepancy, 以下 IPD)によってそれぞれ測定された。主な結果は以下の通りである。(1) 中学校入学後の生活に対する自信や不安は、「学校生活への自信」、「教師への親近感」、「部活動への参加意欲」の3つの領域からとらえられることが示唆された。(2) 分散分析の結果、「学校生活への自信」群と性の交互作用が「生活満足感」、「友人サポート」において、また「教師への親近感」群と性の交互作用が「非侵害的關係」においてそれぞれ有意であった。以上の結果について、学校心理学の観点から検討がなされた。

キーワード：中学校新入生, ズレ, 学校適応感

問題と目的

児童生徒にとって、小学校から中学校への移行は小学校で構造化されていた個人の世界が一時的に崩壊し、中学校入学に伴い再構造化することが求められている事態(米澤・内藤・浅川・水堀, 1985)であり、こうした環境移行は児童期から青年前期への心身の発達の変化と異なる校種への移行とが重なることから「児童生徒にとっては二重の意味で危機的である(古川・小泉・浅川, 1992)」と指摘されている。友人関係の拡大と再構築、学級担任制から教科担任制への移行、部活動への参加、新しい学校の規則や生活スタイルの変化などは新環境への適応が求められる可能性が高いといえるだろう。

小学校から中学校への移行に関しては、中学校入学後の学校適応感に小学校で形成された適応感に対応して形成される(澤田・古川, 1996)ことや、中学校入学前の不安は否定的なものであると考えられることが多い。しかし、期待と不安が組み合わさったときの不安には肯定的な意味が含まれており、中学校生活に対する期待と不安の両面の感情は実際の中学校生活を適応的に過ごす上で重要である(都筑, 2001)ことが指摘されている。

また、中学校入学前の中学校生活に対する予期不安は、中学校での学校適応感に影響を与えている(南・浅川・秋光・西村, 2011)が、中学校という新環境に対する不安が低いから中学校での生活が適応的であり、不安が高いから不適応的なのではなく、予期不安が高くても環境との相互交流によって中学校生活への適応が促進される(南・浅川・福本・古河・松本・古川, 2012)ことが示唆されている。つまり、中学校入学後の適応感を予測する要因として、小学校での適応感、中学校生活への期待や予期不安以外に、期待をしていたが実際は異なっていたとか、あるいはその反対であるというような中学校生活に対する認知的な要因の存在が考えられる。

中学校入学後、自分が入学前に予想していた中学校生活と異なる現実と直面すると、環境に対する準備が整っていないためリアリティショックを感じ、不適応状態になると考えられる。中学校生活に対するリアリティショックと学校適応感の関係を検討した南・浅川・中間・浅川(2011)によれば、中学校入学時の学校生活に対するリアリティショックの軽減が学校適応感を促進することが示唆されているが、入学前の中学校に対する自信や不安が入学後どのように認知されているのかや、それが中学校での学校適応とどのような関係にあるのかを検討した研究はほとんどみられない。

そこで本研究では、中学校新入生の入学前と入学後の学校生活に対する認知のズレを Perceived Discrepancy と操作的に定義し、中学校入学後に学校生活の中でどのようなズレを感じているのかを測定するための尺度を開発することを第1の目的とした。そして、そのズレと学校適応感との関係を探索的に検討し、中学校新入生の学校生活への適応促進のための知見を得ることを第2の目的とした。

予備調査

目的

中学校入学前に感じていた不安についての項目を収集し、中学校生活に対する認知のズレを測定する尺度を開発することが主たる目的であった。

方法

研究協力者 A県B市C中学校の1年生220名(男子106名, 女子114名)が研究協力者として本研究に参加した。なお、C中学校と校区内の小学校の間では、中学校入学前に中学校見学や中学校教師の出前授業などの小中連携のための特別な取り組みは行われていない。

調査時期 2012年6月に実施された。

*宝塚市立光が丘中学校 **兵庫教育大学大学院人間発達教育専攻 ***兵庫教育大学客員准教授

****兵庫教育大学大学院修士課程

手続き 調査は担任教師の教示によって、教室での一斉場面において実施され、「中学校に入学する前に中学校の生活に対して気にしていたり、不安に感じていたことを自由に書いて下さい」という質問に対する回答を自由記述で求めた。

結果

中学校入学前に感じていた不安などについての自由記述の内容をカード化して整えた。その後、教員養成系大学の大学院で心理学を専攻する現職教員5名（小学校1名、中学校3名（うち1名は養護教諭）、高等学校1名）と心理学を専攻とする大学教員1名の計6名によって項目の検討が行われた。その結果、友人関係に関することがら4項目、学習に関することがら3項目、教師に関することがら4項目、部活動に関することがら3項目、中学校の生活に関することがら4項目の計18項目からなる中学校に対する認知のズレ測定尺度（The Inventory of Perceived Discrepancy, 以下 IPD）が作成された。

本調査

目的

中学校入学という環境移行期の認知されたズレの特徴をとらえるとともに、そのズレと学校適応感との関係を探索的に検討することが主たる目的であった。

方法

研究協力者 A 県 B 市 D 中学校の1年生148名（男子78名、女子70名）が研究協力者として本研究に参加した。D 中学校は、都市部校外の住宅地の多い地域にある中学校である。なお、この中学校と校区内の小学校の間では、中学校入学前に中学校見学や中学校教師の出前授業などの小中連携のための特別な取り組みは行われていない。

調査時期 2013年10月に実施された。

質問紙 ①中学校に対する認知のズレ測定のため予備調査で開発された IPD（18項目）が使用された。中学校入学前に感じていた中学校に対する質問項目について、

入学後の印象を回想法で尋ねた。「次の内容について、あなたが中学校入学後どのように感じたのかを答えて下さい」という質問に対して「4 その通りだった、3 どちらかというその通りだった、2 どちらかと違って、1 思っていたのと違って」の4件法で回答が求められた。②中学校生活への適応感を測定するため、栗原・井上（2010）によって開発された6領域学校適応感尺度（以下、ASSESS）が使用された。回答は、「現在のあなた自身について答えて下さい」という質問に対して「5 あてはまる、4 ややあてはまる、3 どちらでもない、2 ややあてはまらない、1 あてはまらない」の5件法で回答が求められた。

ASSESS は、生活全体に対しての満足や楽しさを感じている程度を示す「生活満足感」、教師の支援があるなど教師との関係が良好であると感している程度を示す「教師サポート」、友達からの支援があるなど友人関係が良好であると感している程度を示す「友人サポート」、友達への援助や関係づくりのスキルを持っていると感している程度を示す「向社会的スキル」、無視やいじわるなどの拒否的・否定的な友人関係がないと感している程度を示す「被侵害的關係」、学習の方法もわかり意欲も高いなど学習が良好だと感している程度を示す「学習的適応」の6下位尺度から構成されている。以上のことから、生徒の学校適応感を包括的かつ多面的に捉えることができる尺度であると判断し、本研究では学校適応感の測定にあたっては ASSESS を使用した。

手続き 調査は各教室で調査者による教示・説明の後、学級ごとに集団で実施された。実施にあたっては、(1) 調査は学校の成績とは無関係であること、(2) 調査結果は研究目的以外にはいかなる用途にも供せず教員にも見せないこと、(3) 回答したくなければ回答しない権利があることが文書ならびに口頭で提示された。また、事前に中学校長と学年主任に調査協力依頼を行い、調査結果は研究目的以外にはいかなる用途にも供せず教員にも見せないことを伝え了解を得た。

結果

中学校に対する認知のズレ測定尺度（IPD）の開発（分析1）予備調査で開発された IPD の因子構造を検討するため、入学直後の様子に対する18項目について主因子法による探索的因子分析をおこなった。初期の固有値の減衰状況（3.36, 2.59, 1.78, 1.50, 1.27, 1.06, …）から3因子構造を仮定し、主因子法-プロマックス回転による探索的因子分析を行った。因子負荷量、因子の解釈の可能性を考慮した結果、最終的に3因子14項目が検出された。第1因子は、「自分がいじめられることはない」、「クラスでひとりぼっちになることはない」、「中学校の生活にはすぐ慣れる」などの項目から構成されたため「学校生活に対する自信」と命名した。第2因子は、「中学校の授業はおも

Table1 因子分析結果（主因子法-プロマックス回転） $\alpha = .78$ （尺度全体）

	第1因子	第2因子	第3因子
【学校生活への自信】 $\alpha = .78$			
12自分がいじめられることはない	.74	-.14	-.06
9クラスでひとりぼっちになることはない	.73	-.03	.08
1クラスの人と仲良くできる	.73	.01	.04
6他の小学校出身の人とも友だちになれる	.54	.15	-.17
11中学校の生活にはすぐ慣れる	.50	.02	.18
8制服を着るのはめんどろではない	.48	-.08	-.12
【教師への親近感】 $\alpha = .81$			
13中学校の先生はおもしろい	.03	.82	-.07
14中学校の授業はおもしろい	.03	.74	-.04
10中学校の先生は話しやすい	.07	.67	-.01
2中学校の先生はやさしい	-.17	.58	.11
5中学校の先生はほとんどおこらない	-.09	.52	.03
【部活動への参加意欲】 $\alpha = .80$			
18部活動についていける	.03	-.06	.92
17部活動の練習は楽しい	-.08	.05	.76
16部活動の先ばいはやさしい	-.05	-.02	.64
因子間相関			
	第1因子	-	.40
	第2因子	-	.36
	第3因子	-	-

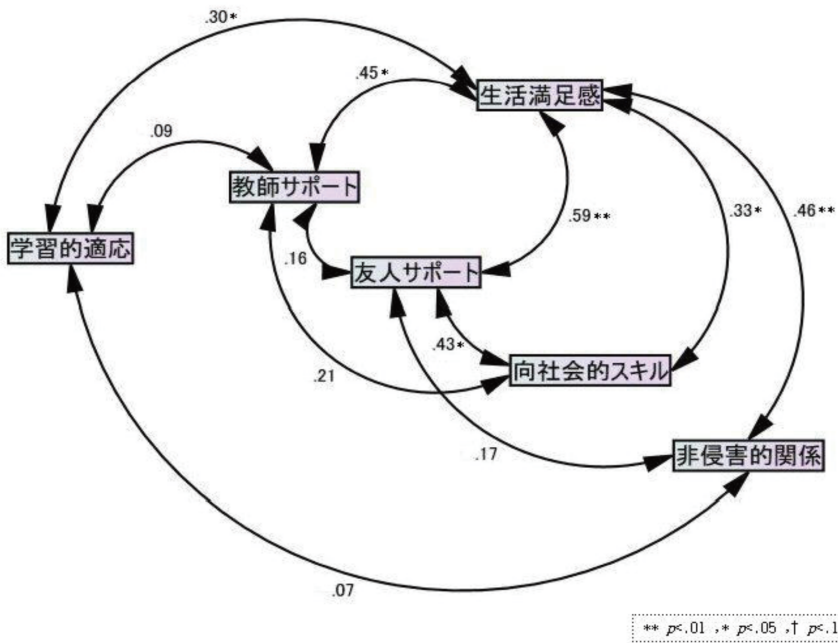


Figure1 IPD 下位群の因子間相関

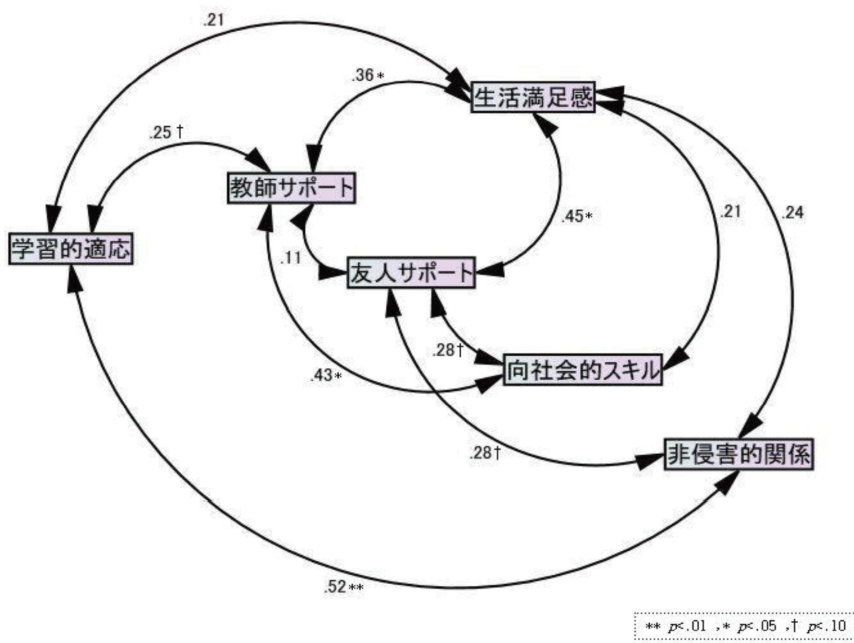


Figure2 IPD 上位群の因子間相関

しろい」, 「中学校の先生は話しやすい」, 「中学校の先生はおもしろい」など中学校の教師に対する親しみに関する項目から構成されていたため「教師への親近感」を命名した。また第3因子は、部活動に関する項目でまとまったため「部活動への参加意欲」と命名した。なお、因子間相関係数は第1因子と第2因子間で $r = .22$, 第1因子と第3因子間で $r = .40$, 第2因子と第3因子間で $r = .36$ であった (Table1)。

本尺度の内的整合性を検討するために尺度全体と下位尺度で Cronbach の α 係数を算出したところ、全体は $\alpha = .78$, 下位尺度においては「学校生活への適応」 $\alpha = .78$,

「教師への親近感」 $\alpha = .81$, 「部活動への参加意欲」 $\alpha = .80$ であり、信頼できる内的整合性を有していた。また、本尺度の弁別力を検討するために全14項目について、平均値+1/2SD以上をG群、平均値-1/2SD以下をP群としてG-P分析を行ったところ、全ての項目において有意 ($t_{(69-90)} = 24.35 \sim 38.39, p < .001$) であり、尺度の程度を弁別する有効性を有していた。また、探索的因子分析で得られた各因子を潜在変数とした仮説的モデルを作成し、共分散構造分析を行ったところ適合度指数は $GFI = .91$, $AGFI = .87$, $RMSEA = .05$ であり、概ね妥当な尺度であると判断された。

認知のズレと学校適応感との関係の検討 (分析2)

ASSESS の6下位尺度間関係をみるために、IPD 下位尺度合計得点の最低値から平均値-1/2SDをIPD下位群 ($n = 32$), 平均値+1/2SDから最高値をIPD上位群 ($n = 36$)として、栗原・井上 (2010) のモデルに倣ったASSESSの6下位尺度得点を観測変数とするモデルを作成し共分散構造分析を行い、IPDの水準別の相関係数を求めた。適合度指標は $GFI = .97$, $AGFI = .82$, $RMSEA = .00$ であり、概ねモデルへあてはまっていることが確認された。IPD下位群では、「生活満足感」と「教師サポート」, 「友人サポート」, 「向社会的スキル」, 「非侵害的關係」, 「学習的適応」との相関, 「向社会的スキル」と「友人サポート」との相関がそれぞれ有意 (有意傾向)であった。一方、IPD上位群では、「生活満足感」と「教師サポート」, 「友人サポート」との相関, 「教師サポート」と「向社会的スキル」, 「学習的適応」との相関, 「非侵害的關係」と「学習的適応」, 「友人サポート」との相関, 「向社会的スキル」と「友人サポート」との相関がそれぞれ有意 (有意傾向)であった (Figure1, Figure2)。

次に、IPDによって測定されたズレと学校適応感の関係を検討するため、IPDの下位尺度別に最低値から平均値-1/2SDまでをL群、平均値-1/2SDから平均値+1/2SDまでをM群、平均値+1/2SDから最高値までをH群の3水準に分類した後、ASSESSの下位尺度得点をIPDの水準 (L群・M群・H群)と性別 (男子・女子)について整理した (Table2)。

次に、中学校生活に対する認知のズレと学校適応感との関係を検討するため、ASSESSの下位尺度得点を従属変数とし、IPDの下位尺度別水準 (群)と性を独立変数とする2要因の分散分析を行った。その結果、「学校

Table2 PD水準・性のASSESS下位尺度得点平均値および標準偏差

		n	生活満足感		教師サポート		友人サポート		非侵害的關係		向社会的スキル		学習的適応			
			M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD		
学校生活への自信	L群	男	10	14.70	6.34	14.60	6.10	16.80	4.37	13.90	5.13	16.60	2.63	14.70	2.91	
		女	17	10.82	4.73	11.53	5.21	15.24	5.47	13.29	4.16	16.06	3.91	12.47	3.86	
	M群	男	23	14.61	4.70	14.39	4.55	16.52	3.65	17.91	4.49	16.43	4.63	13.70	5.45	
		女	24	17.00	4.20	13.71	4.01	21.50	3.24	17.38	4.05	18.88	3.29	13.08	4.62	
	H群	男	34	18.56	3.71	15.41	4.87	19.56	4.18	19.44	4.14	17.29	3.97	15.88	5.86	
		女	20	19.50	2.95	15.90	4.20	22.45	2.14	20.45	4.21	19.75	2.51	14.95	5.85	
	教師への親近感	L群	男	20	14.70	5.47	11.20	3.81	17.40	5.48	19.50	4.65	14.65	4.36	13.00	5.19
			女	15	13.07	5.19	10.67	4.50	18.13	5.67	15.33	5.88	17.00	3.53	12.60	5.60
M群		男	24	16.67	4.69	15.33	4.03	17.71	3.26	18.00	3.60	17.00	3.09	16.17	4.40	
		女	28	16.39	4.11	14.71	3.82	20.93	2.64	17.64	4.37	18.07	2.81	14.07	5.30	
H群		男	23	18.26	3.99	17.78	4.62	19.13	3.86	16.96	5.67	18.74	3.73	15.39	6.23	
		女	18	18.17	5.95	15.06	5.08	20.33	6.19	18.22	4.77	20.00	4.07	13.44	3.65	
部活動への参加意欲		L群	男	19	15.47	5.43	12.95	4.31	16.95	4.27	18.63	4.88	16.05	4.81	14.79	5.35
			女	21	14.81	4.66	11.86	4.36	18.95	5.39	16.71	4.82	18.05	3.29	13.38	5.87
	M群	男	20	15.50	3.93	15.50	4.58	18.50	3.50	16.95	5.07	16.35	3.27	13.45	5.31	
		女	13	16.62	5.58	15.31	4.55	20.62	4.01	17.92	6.09	18.23	4.34	14.38	5.06	
	H群	男	28	18.21	4.77	15.89	5.26	18.61	4.65	18.54	4.43	17.86	3.86	16.14	5.41	
		女	27	16.85	5.52	14.63	4.63	20.67	4.62	17.33	4.57	18.07	3.39	13.22	4.10	

Table3 分散分析(主効果及び単純主効果の検定)結果 (F値)

		生活満足感	教師サポート	友人サポート	非侵害的關係	向社会的スキル	学習的適応	
学校生活への自信	群	18.46 ***						
	性	L<M<H					4.25 *	男<女
	群×性	L群4.34 *		M群17.18***				男<女 H群6.66 *
教師への親近感	群	7.48 **	16.28 ***			9.18 ***		
	性	L<M<H	L<M<H		4.55 *	5.86 *	男<女	
	群×性				L群5.10 *		男>女	
部活動への参加意欲	群		5.30 **					
	性		L<M<H		6.29 *	5.14 *	男<女	
	群×性							

F値は有意な箇所のみ記載 *** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

生活に対する自信」群と性の交互作用が「生活満足感」(L群： $F(1,133)=4.34$, $p<.05$)において有意であり、女子群よりも男子群の得点が高かった。また、「友人サポート」(M群： $F(1,128)=17.18$, $p<.001$ ；H群： $F(1,128)=6.66$, $p<.05$)においても交互作用が有意であり、どちらも男子群よりも女子群の得点が高かった。さらに、「教師への親近感」群と性の交互作用が「非侵害的關係」(L群： $F(1,133)=5.10$, $p<.05$)において有意であり、女子群よりも男子群の得点が高かった。

また、「学校生活に対する自信」の群間の主効果が「非侵害的關係」($F(2,122)=18.46$, $p<.001$)においてみられ、L群、M群、H群の順に得点は高くなっていった。「教師への親近感」の群間の主効果は「生活満足感」($F(2,122)=7.48$, $p<.01$)と「教師サポート」($F(2,122)=16.29$, $p<.001$)にみられ、いずれもL群よりもM群・H群の得点が高かった。「部活動への参加意欲」の群間の主効果が「教師サポート」にみられ、L群より

もM群・H群の得点が高かった(Table3)。

考察

本研究の結果から、中学校入学後の生活に対する自信や不安は、「学校生活への自信」、「教師への親近感」、「部活動への参加意欲」の3つの領域からとらえられることが示唆された。「学校生活への自信」の水準別の人数をみると、H群が54名(42.2%)を占めており中学校生活に対して自信を持っている生徒の割合が高い。都筑(2001)によれば、中学校入学前の不安の大きさに比べて入学後の悩みは少なく、入学前に抱いていた幾分控えめの期待に比べて入学後の楽しみが多いことを明らかにしている。その意味ではIPDの第1因子である「学校生活への自信」に見られるように中学校入学後の生活をポジティブにとらえているように思われる。しかし、教師に関する項目が「教師への親近感」として一つの因子にまとまったことについては、中学校入学前は中学校の教師に対してきびしいとかかわいといったイメージが強

かったが、実際にはやさしくおもしろいと感じられたことによるのではないと思われる。また、部活動に関する項目が「部活動への参加意欲」として一つにまとめたことについて、小学6年生の中学校生活に最も期待しているものが部活動であり、その割合は80%を越えている(都筑, 2001)を考えると妥当な結果であるといえるだろう。

次に、ASSESSの結果をみると、全体的適応感を示す「生活満足感」と他の5因子との関係において、IPD下位群では、「友人サポート」と「向社会的スキル」間の相関が有意であったものの、5因子それぞれとの相関が有意(有意傾向)であった。これは、中学校生活に対して「自分が思っていたのと違うなあ」といった違和感を持っていた生徒にとっては、教師や友人との良好な関係、いじめられないことや勉強がよくできることなどは互いに関連しあっておらず、「生活満足感」を高めるためには他の領域をそれぞれ個別に高めていく取り組みが必要であると思われる。一方、IPD上位群では、「生活満足感」と「教師サポート」、「友人サポート」との相関が有意であり、「教師サポート」は「向社会的スキル」、「学習的適応」と、また「友人サポート」は「向社会的スキル」、「非侵害的關係」との相関が有意(有意傾向)であった。これは、中学校生活に対して「ほぼ自分が思っていた通りだった」と思っていた生徒にとっては、教師や友人との良好な関係が学校生活に対する満足感に影響しており、その教師や友人との関係づくりには、いじめられないことや挨拶をしたり周囲の手助けになること、また勉強がよくできることが関連しており、「生活満足感」を高めるためにはどれかの領域を高めていくことで、関連しあっている領域が高められていくと考えられる。

また、「学習的適応」について、栗原・井上(2010)では「学習的適応」と「教師サポート」、「非侵害的關係」が関連しており、学習適応においては教師からのサポートが重要であることはもちろんのこと、いじめられている生徒は勉強どころではなく学習適応が下がる可能性が高いことが指摘されている。しかし、本研究の結果では、IPD下位群は「学習的適応」と「教師サポート」、「非侵害的關係」とはほとんど関連していなかったが、IPD上位群では関連がみられた。つまり、中学校生活に対して違和感を持っていた生徒は、友人関係が良好であることやいじめやからかいなどの侵害的行為のないことが学習意欲にむすびついていないことを示しているといえよう。

さらに、中学校入学後の印象とASSESSとの関係をみると、入学後の「学校生活への自信」が低かった場合、2学期になっても友人関係は良好であるとはいえず、中学校の生活全体に対しても満足や楽しさを感じてはいなかった。また、入学後の「教師への親近感」が低かった場合、2学期の段階で教師からの支援を感じてはならず、対人関係を築くスキルも低いことや中学校の生活全体に対しても満足や楽しさを感じていないことが明らかとなった。これらの結果は、入学後1ヶ月、あるいは長くとも1学期のうちに新環境への再構造化が図られるという内

藤・浅川・小泉・米澤(1985)の報告からとらえるならば、新環境への再構造化がうまく図られていないと考えることができる。小中学校の移行期における教師との関係について、小泉(1995)、澤田・古川(1996)、南他(2011)では、中学1年生(特に1学期)の時点で教師に対する親密性や期待感が低下していたことが明らかにされている。すなわち、学校における教師以外の要因(友人関係、学習など)については、自ら能動的にその環境に対して働きかけることができるが、教師との関係は中学生自身が教師に直接働きかけて調整することは難しいといえるだろう。したがって、小中学校の移行期における学校適応を考える上で、ともすれば友人関係や学習意欲に目が奪われがちであるが、本研究の結果からは教師との関係について、入学後の生徒に対する教師側からの心理的・予防的な取り組みが重要といえるだろう。入学後の「中学校生活への自信」や「教師への親近感」の側面からみると、男子では約半数、女子では約3割弱が何らかの教育的支援を必要としていると考えられ、「中1ギャップ」といわれる学校不適応につながる可能性も否定できない。質問紙調査などで生徒の状況を把握することや社会的スキルを高める取り組み、個別の教育相談などにより学校適応を促進する必要があるだろう。

また、入学後の「部活動への参加意欲」が低かった場合、2学期の段階で教師からの支援を感じてはいなかった。部活動への参加意欲の低さは、教師(顧問や担任)からあまり認められていないとか期待されていないと感じることにつながっていると考えられる。こうした生徒は部活動に対する意欲だけではなく、友人関係や学習の面においてもうまく対処できなかったり自信を持っていないままでも考えられる。小学6年生の80%が中学校生活で最も期待している(都筑, 2001)中学校の部活動であるが、中学校入学後の時点で部活動への参加意欲が低い生徒に対しては、部活動をとおして自信を持ったり、達成感を得ることができるような関わりを含めた心理教育的な支援が必要であろう。

まとめと今後の課題

本研究における中学校生活に対する認知のズレは、自由記述によって得られた入学前の中学校生活に対するイメージを項目化し、その質問項目に対して入学後どのように感じていたのかを尋ねたものである。その結果、友人関係を中心とする学校生活、教師との関係、部活動の面でズレを感じていることが明らかとなった。また、入学後の学校生活に対して自信が持てない生徒や教師に対して親しみをあまり感じられない生徒は、小中移行という環境の変化にうまく対応できていない可能性が示唆された。加えて、中学校生活に対するズレを感じている生徒の生活満足感を高めていくためには、生活満足感以外の領域(友人、教師、向社会的スキルなど)に対して個別に働きかけることが必要であろう。例えば、向社会的スキルが高まることによって友人や教師との関係が良好になり、それが学習意欲につながるというように、どこかの領域に焦点化して支援を行うことで全体的に効果が

みられるということではなく、どこかの領域に焦点化した支援を行っても、全体としては効果がみえにくくなることが予想される。こうした点を考えると、中学校生活に対するズレを感じている生徒に対するていねいな取り組みが必要であろう。

次に本研究の限界について述べる。本研究では、生徒自身が中学校生活に対するズレを、どのように意味づけているのかという点について検討することができなかった。仮にズレを感じたとしても、それをその後の中学校生活で肯定的に捉えることができればズレそのものが負の影響を及ぼすものとはならない。したがって、中学校生活の中で認知されたズレがどのように意味づけられているのかという点について、検討していくことが必要ではないかと思われる。

引用文献

- 古川雅文・小泉令三・浅川潔司(1992) 小・中・高等学校を通じた移行 山本多喜司・S.ワップナー(編著) 人生移行の発達心理学 北大路書房
- 小泉令三(1995) 小学校高学年から中学校における学校適応感の横断的研究 福岡教育大学紀要, 44, 第4分冊, 295-303.
- 栗原慎二・井上 弥(2010) アセス(学級全体と児童生徒個人のアセスメントソフト)の使い方・活かし方 ほんの森出版株式会社
- 南 雅則・浅川潔司・秋光恵子・西村 淳(2011) 小学生の予期不安と中学校入学後の学校適応感との関係に関する学校心理学的研究 教育心理学研究, 59, 144-154.
- 南 雅則・浅川潔司・福本理恵・古河真紀子・松本 剛・古川雅文(2012) 中学校生活に対する予期不安と入学後の学校適応感に関する研究 教育実践学論集, 13, 103-111.
- 南 雅則・浅川潔司・中間玲子・浅川淳司(2011) 中学校への環境移行における予期不安・リアリティショックと学校適応感との関連 日本青年心理学会第19回大会発表論文集, 26-27.
- 内藤勇次・浅川潔司・小泉令三・米澤孝雄(1985) 児童の新教育環境移行に関する研究 兵庫教育大学紀要, 5, 81-90.
- 澤田俊和・古川雅文(1996) 中学校への環境移行における学校適応感と期待・不安・目的意識に関する研究生徒指導研究, 7, 70-88.
- 都筑 学(2001) 小学校から中学校への進学にとまなう子どもの意識変化に関する短期縦断的研究 心理科学, 22, 41-54.
- 米澤孝雄・内藤勇次・浅川潔司・水掬義朗(1985) 小学校から中学校への環境移行(I) 中国四国心理学会論文集18, 57.